

2016年度 夏休み経済教室 in 大阪 記録①

8月8日(月) 会場：国民會館

炎暑の名古屋に負けじと、大阪も炎暑であった。

主催者挨拶のあと、1時間目の講義が開始された。

1時間目：「経済学習におけるアクティブラーニングの進め方」

東洋大学の栗原久先生による講義である。詳細は名古屋の第一日目を参照されたい。

【質疑】 時間を取らず質問票対応とする

質問票：アクティブラーニングと需給バランスの教え方との関係がわかりにくい…。

→需給バランスに関してはしっかり教えるべき。比較優位も同様。教えるべき点はしっかり教える。教え方の活用に関してはグループで考えさせる。入試問題などを活用して考えさせたい。教えるべき点を教えないと学力格差が広がるリスクもある

2時間目：実践紹介「経済分野で実践するアクティブラーニング TPPを題材とした課題探求学習の試み」

(1) 前半は、安野雄一先生(大阪教育大学附属平野小学校)による小学校5年生の実践報告である。詳細は名古屋の第一日目を参照されたい。名古屋より若干、映像を見る時間が多かった。

(2) 後半は、奥田修一郎先生(大阪狭山市立南中学)の実践報告である。詳細は名古屋の第一日目を参照されたい。

奥田先生の急な通院のため、講義に間に合うか危ぶまれたが、若干遅れて到着された。

時間の関係で、教科書の比較は説明することができたが、無人島のゲームについては、教材の提示にとどめた。丁寧な自家製教材をパウチで作成されており、先生の授業への思いが感じられるものであった。

【質疑】

※なし。

3時間目：「中学教科書で読み解く金利とは何か」

講師は、野間敏克先生(同志社大学政策学部教授)である。詳細は名古屋の第一日目を参照されたい。実際に中学生に金融や金利を教えた時の経験から、エコノミストの想定外にある中学生の思考回路をふまえて解説された。

【質疑】

① 「プライマリーディラーをやめる金融機関が他に広がるか」

→他行に広がったら、国債暴落になる。三菱…の系列がのこっているのが三菱は問題ない。国債暴落は怖いけどみんな持っているから怖くない面もある 国債は良い金融商品ともいえる。

② 長期金利も若干上昇しているか」

→住宅ローンなど金利は、変動が良いか固定がいいかよく聞かれる。世界的に超金融緩

和の状態であり、国債暴落も起こる可能性を否定できないのは経済学者の常識である。

③ 司会者より「日銀が国債を引き受けるのはよくないと以前は教えたが…」

→日銀が国債を直接引き受けるのはだめ。現在の方法は、政府が市中に供給し、日銀はあくまでも民間を含めた市場から買い取っている。日銀は市場原理が働いているので問題ないというのが公式見解である。

④ 「なぜマイナス金利になったのか？」

→予想の話はしたくなかったので、ここは触れていない。物価を上げたいのは疑わしいと思う。

⑤ 「アベノミクスの行き詰まりで、苦し紛れでマイナス金利をやったのか？」

→たぶんそうかなとも思うが、判断はできない。

⑥ 「マイナス金利は社会にとって本当に良いことなのか？」

→ゼロ金利はできないからマイナス金利しかないとなった。成長しない経済になる可能性がある…。

4 時間目:実践紹介「経済と日本地理の融合教材～米どころ新潟の地域再生を中心に～」

「授業に生かす経済教育」

(1) 河原和之先生（授業のネタ研究会常任理事他）による教材紹介からはじまった。

河原先生の授業に対するお考えについては、名古屋の第一日目を参照されたい。

授業事例としてとりあげた「米どころの新潟のこんなびっくり！」の教材は、地理と経済、歴史と経済を融合させる考える社会科教育のシリーズの一環として作成されたものである。

まず参加の先生方にクイズ「新潟の人口」で、明治初期の新潟・石川・山口・東京の人口の順序をあててもらった。東京と新潟では新潟の方が人口が多かったという驚きをもとに、その理由を当時の主要産業から考えてもらった。

次に現在の新潟県の位置づけから、産業での工夫や新しい取り組みを紹介された。そして新潟の事例を新潟だけで終わりにせず、「では東大阪市では…」と、自分の地域と関連させた学習活動に取り組まれているところが、河原先生の特色である。

(2) 三枝利多先生による、活動型授業の紹介

三枝先生からは、「公民的分野は出口の分野である」というメッセージがまずあり、授業づくりの本質をつかむことを大切にしてこられたことを強調された。指導要領を読み解き、まず「ここをつかませたい」というねらいをはっきりさせる作業である。そのうえで、教材づくりの方法や例が、無人島へ漂着した事例を中心に説明された。まず自分の生存のための工夫から、選択・分業・交換・交易と発展していく様子を、生徒の意思決定過程を伴うものである。会場の先生方も、ミッションに取り組みながら、意思決定をし、それがどのような意味を持つかを認識されていた。

【質疑】

※なし

文責 升野伸子